



TITLE:

天文用語に関する私見(5)

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 天文用語に関する私見(5). 天界 1934, 15(163): 12-14

ISSUE DATE:

1934-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166910>

RIGHT:

天文用語に関する私見 (5)

(山 本 生)

星のバイエル符號について.

西曆 1603 年に Bayer は其の著 Uranographia に於て各々の星座中にある個々の星に, α, β, γ ……等のギリシャ文字を附した. それで, 其の後には人が皆, 個々の星を呼ぶのに, α Andromedae, β Ceti, γ Cygni……等と呼ぶやうになつた. 言ふまでもなく, 之れは文法上,

Andromeda 座の中の α 星,
Cetus 座の中の β 星,
Cygnus 座の中の γ 星, 等

といふ意味であるから, 星座の名が皆この場合には所有格になつてゐる.

さて, このギリシャ字の呼び方である. ギリシャ式の 24 字は今一般に各國共通の呼び方があつて, 其れを近似的に日本の片カナで記すと,

α アルファ, β ベータ, γ ガムマ 等々

となる. だから, 星の名を呼ぶ場合にもと

α Andromedae を “アンドロメ座のアルファ星”

β Ceti を “くじら座のベータ星” 等々

と呼んで好いわけである.

しかしながら, 自分は思ふに, 吾々日本人の立場から考へて見ると, 一般の歐米人と違つて, 平常からギリシャ文字を原則として皆知つてゐなければならぬ必要などは殆んど無いのであつて, 従つて, 只, 天文ファンだけには特に此の覺えにくい 24 字と其の順序とを覚えて貰はなければならぬやうな負擔をかけることは價值の無いことであると思ふ. 殊に吾が日本人は, もつと手近い日常生活に於いて, 漢字や平カナや片カナは言ふに及ばず, 今日ではアラビア數字や, ローマ文字等に至るまで, 一應知つてゐなければ不便の多い時代である. こうして, 歐米人に比して, 幾十倍の重荷を負はせられてゐる日本人である. それに尙ほ, 天文を趣味とするための前提として, 他には殆んど流用の途の無いギリシャ字を 24 ヶも覚えなければならぬやうに仕

向けるのは實に氣の毒である。

そもそも、歐州にアラビヤ數字が移入されるまでの時代には、ギリシャ文字 $\alpha, \beta, \gamma, \dots$ が一般に數字として用ゐられたのであるから、三百年の昔、バイエルが此れを星の名に附した頃の心では、要するに、個々の星に、單に番號を附したぐらゐの心持ちであつたのである。従つて、バイエル自身の心を今の吾々が考へるならば、

$\alpha, \beta, \gamma, \delta, \dots$ の代りに單に 1, 2, 3, 4, \dots

といふ風に星を呼んでも好いわけなのであるし、又は、少しく進んで、

$\alpha, \beta, \gamma, \delta, \dots$ の代りに寧ろ イ, ロ, ハ, ニ, \dots

といふ風に全く日本化して了つた呼び方をするこゝも、理由はあるのである。しかし、前にも、他の問題に關連して一言したやうに、今日の學術は非常に國際的な性質を持つてゐるのであるから、若し日本の天文學と外國の天文學とが徹底的に無關係なものならば、外國で $\alpha, \beta, \gamma, \delta, \dots$ と呼んでゐるものを、日本でイロハニ, \dots 等と呼んでも差支へないかも知れないけれど、實は彼我の間が決して無關係沒交渉でゐられない現状に於いては、我が日本語での星の名の呼び方が、なるべくは、容易に其の外國名を直ぐ聯想するやうにして置くことが便利である。故に、自分は過去十數年來、多少の反對論を押し切つて、

$\alpha, \beta, \gamma, \delta, \dots$ の代りとして ア, ベ, ガ, デ, \dots

と言つたやうな文字を用ゐることを實行し、又、推奨してゐるのである。こうしてさへ置けば、

ア と言つて、(識者には)すぐ其れが α と連絡あることが知られ、

ベ () β

ガ () γ

等々、以下同様である。——又、 α を必ずしも「アルファ」と完全に發音しなければならない必要は無いこと勿論である。こうした點は、語と符號との區別や差違を、言語學的な立場から深く考へて見るべき、甚だデリケートな議論であつて、讀者の眞摯賢明な判慮を特に煩はしたいのである。

上述の如き、廣き、又、深き見地から、我が日本語に對する愛と、又、天

文學に對する人間的あこがれと、文字乃至符號の文化的使命に對する洞察とから、自分は別表の如き相關々係を十數年來認識し、實行してゐるのであるが、問題が高尙でデリケートであるだけ、それだけ、世に本統の意味を了解してくれる人が少なく、まだ普及の前途が遠いやうに思はれるのは残念である。只、賢明なる長野縣の教育者たちがひとり此の理を了解し、數年前から其の縣内の諸學校に用ゐられる理科書の中に此のアベガデ……の音符を使用してゐられるのを見て、愉快に堪えない。

希 臘 文 字

α	アル	フ	ア	略して	ア	ν	ヌ	ι	略して	ヌ
β	ベ	ι	タ	ク	ベ	ξ	ク	シ	イ	クシ
γ	ガ	ン	マ	ク	ガ	ο	オミ	ク	ロン	オミ
δ	デ	ル	タ	ク	デ	π	ピ	ι	ク	ピ
ε	エ	プ	シ	ロン	エ	ρ	ロ	ι	ク	ロ
ζ	ゼ	ι	タ	ク	ゼ	σ	シ	グ	マ	クシ
η	エ	ι	タ	ク	エ	τ	タ	ウ	ク	タ
θ	テ	ι	タ	ク	テ	υ	ウ	プ	シ	ウ
ι	イ	オ	タ	ク	イ	ϕ	フ	イ	ク	フイ
κ	カ		パ	ク	カ	ψ	ヒ	ι	ク	ヒ
λ	ラ	ム	ダ	ク	ラ	ω	プ	シ	ι	プシ
μ	ム	ι	ク	ク	ム	ω	オ	メ	ガ	オ

倉敷天文臺の經緯度測定さる

去る10月13日より同16日迄花山天文臺の山本、稻葉、公文、高城諸氏は倉敷天文臺の經度及び緯度を觀測した。天氣は案外曇に悩まされたが結果（暫定）は下の通りである。

經 度 東 經 8時 55分 4.96秒

緯 度 北 緯 34° 35' 33.3 "

尙これは後に東京船橋局報時修正値と緯度變化要素による修正値を加へて最後の値が得られる筈である。（花山急報 第108號より）